

説教題：「クリスマスを迎えて」聖書箇所：ルカ福音書 2章1-20節（p.102）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌 93 - 1 - 20 交読詩編：第126編 1 - 6節（p.143）

讃美歌：83（聖なるかな）／248（エッサイの根より）258（まきびとひつじを）／264（きよしこの夜）／27

「今週の聖句」〔今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主召してである。〕（ルカ伝2：11）

「牧師室の窓」「祈りつつ迎えしこの日クリスマス神の平和の心に満ちて」

「地上にて戦なき世を築かんと神の平和を御子は生まれし」

(1) <…始まる前に一言申し上げます。本日は小さなお子さんが幾人もおられます。礼拝中に泣き声をあげることは、全く構いません。小さな子供の大切な仕事ですから。…>では、始めます。皆様おはようございます。本日はクリスマス礼拝ですので、皆様と共に「クリスマスおめでとう」、と声を合わせて始めたいと思います。準備運動としてお口をもごもごと動かしていただきまして、宜しいでしょうか。クリスマスおめでとうです。1、2の3、はい「クリスマスおめでとう」。…ありがとうございました。声を出すと言うことは大切なことです。皆様は毎日どのくらい声を出されていますでしょうか。お口を動かすと頭の中の脳が活性化しますので、健康増進にも円滑な社会生活にも効果があるとされています。歩くことについては万歩計がありますが、同様に一日に言葉を幾つ話したかの発声測定器があっても宜しいのではと思います。目安として「ありがとう」を一日に100回言っては如何でしょうか。…今日の聖書箇所は2つの場面から構成されています。その中でどの様な言葉が、会話が話されているのかを、皆様ご自身が、南板橋教会テレビ局から派遣された特派員として、レポーターとして今日の聖書の場面に入り、ご体験をしていただきたいと思います。

(2) 今日の聖書箇所のうち、最初の場面はイエス様誕生の様子が描かれています。この中には会話としての文字が書かれてはいませんが、多くの人の声が聞こえてはきませんでしょうか。ローマ帝国皇帝アウグストゥスの突然の命令により、人々は住民登録をするために所属する町へと旅立たざるを得なかったのです。人々の困惑の声が、旅立つ雑踏の音が聞こえてきませんでしょうか。ベツレヘムで住民登録をするために並んでいる人々の話し声が、役場の受付での係員の命令口調が聞こえてきそうです。その雑踏の中に、ガリラヤ地方のナザレ村から約100kmもの道を歩いてきたヨセフと身重のマリアがいたのです。おそらくはマリアはロバの背に乗ってきたのでありましょうが、ガリラヤからベツレヘムまでは標高約800mの山あいの登り道下り道を縫うように来ましたので、身重のマリアにはつらい道のりであったと思われます。庶民であるヨセフは住民登録を断ることが出来ないのです。途中で何度も休みつつ井戸を見つけては水を貰い、野宿をしての旅でありました。現在の私たちから見れば実に危険な旅であると言えます。ヨセフとマリアは

どのような会話をしてきたのでしょうか。互いに労（いた）わりあってこそその道中でありましたでしょう。

(3)6節7節を見てみましょう。〔(2:6)ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、/(2:7)初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。〕ガリラヤからの過酷で長い旅でありましたが、ベツレヘムでマリアは出産したのです。文字には記されてはいませんが、無事に出産したことが伺えます。出産が死と隣り合わせであった2千年前の時代に無事に出産することは奇跡と言えましょう。マリアとヨセフの安堵の声が伝わってきます。そして、何よりも赤子の泣き声が聞こえています。季節はいつ頃であったのでしょうか。現在、中近東パレスチナのガザ地域で行なわれている戦争で、多くの避難民が苦しんでいます。国際連合事務総長のグテーレスさんが戦争終結に向けて努力されておられますが、事態は深刻化しています。この実態・現実を私たちは目をそらさず、命の大切さをクリスチャンは呼び掛けねばなりません。…現地は雨が降る季節（雨期）であり、テント生活の地面が雨水で濡れて困っているとテレビ報道されていました。ガザもベツレヘムもエルサレムも地球上の位置は北緯31度強ですから、日本の鹿児島市とほぼ同じ位置にあり、夏の時期以外は野宿するにはつらかったと推測されます。…7節には「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」と書かれています。そして、赤子であるイエス様は「布にくるんで飼い葉桶に寝かせ」られたのです。「飼い葉桶」とは馬・ロバに食べさせる干し草を入れる入れ物です。私たちは木で作った「飼い葉桶」を想像しますが、現地では木工品は貴重品であり、おそらくは石を削った台のようなものと思われます。私たちの想像をはるかに超えた粗末な状況であったと思われる。

(4)私たちは貧しさ・貧困とは縁遠いように感じてしまいがちですが、現代日本でも存在しています。私が幼い頃は貧困は身近にありました。私の家には毎日食べるお米が米びつと言う木製の箱に入っていて、子供心にも食べ物が少なくなっていることの恐怖感を実感することがありました。大学生の時は下宿生活をしており、1年間は外食生活でした。学校の授業料は1年間で1万2千円、月割にすると1ヵ月千円の時代です。夕食は学校の食堂で済ませますが、1週間のうち何回かは街中の食堂に通いました。1食90円の定食を食べました。あと20円を追加して110円の定食を食べたいのですが、我慢・我慢でした。すると、お客が10人も座れない食堂のご亭主とおかみさんが3枚におろした魚の骨の部分のカリカリの唐揚げにして出してくれました。無料、ただです。嬉しかったですね。魚の骨の唐揚げがこんなにも美味しいことを、まさに骨身に知りました。その食堂の名前が「ハレルヤ」でした。私は数年後に教会に通い、ハレルヤの意味を知りました。ヘブル(ヘブライ)語で「主をほめたたえよ」という意味です。この食堂の夫婦は間違いなくクリスチャンであると確信しました。…話が脱線してしまいましたが、2千年前のイエス様の時代には貧困が身近にあったのです。そのような環境の中で語られたイエス・キリストの御言葉は人々の中に希望と勇気を与えたのであります。

(5)今日の聖書箇所の後半は羊飼いたちが天使と出会う場面です。羊飼いと言うのは、当時では下層階級の職業でした。2千年前と言えども農業や商業が相応に発達していましたからです。そのような人々に対して「主の天使」が現れたのです。神が行動を起こすことを「時の徴(しるし)」と言います。「徴(しるし)」とは英語で言えば「sign(サイン)」です。つまり、主なる神が時代を変化させる「徴(しるし)、sign(サイン)」を送られたのです。そのsign(サイン)は学者にでもなく上級階級にでもなく、貧しく、純朴な人々に送られてきたのです。この様な場面設定からしても、聖書はただ物ではないことが伝わってきますね。今日の聖書箇所の10節～14節にはsign(サイン)の内容が書かれています。お読みします。〔(2:10)天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。/(2:11)今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。/(2:12)あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」/(2:13)すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。/(2:14)「いと高きところには栄光、神にあれ、/地には平和、御心に適う人にあれ。」〕

(6)皆様は今までに何かの「しるし、sign(サイン)」を感じたことはありませんでしょうか。…私事ですが、私は大阪での職場勤務では、京都方面に向かって吹田市にある社宅に住んでいました。市内にはビール会社の工場がありました。工場の裏手には会社勤務中に亡くなった人々の慰霊碑があり、数人の職員が掃除や石碑を磨いていました。地味な作業ですが、手抜き仕事ではないことは見ていれば分かります。当時日本のビール会社の売上高順位ではこの会社の順位は3社中の3番で長い間固定化していました。アメリカのハーバード大学経営学大学院の教科書には、この順番はこれからも変わることはない、会社分析の具体的事例として挙げられていたと記されています。併し、私はこの会社の業界順位は伸びていくと思いました。私がおその場に居合わせたのは、その会社の缶ビール新製品が発売された翌年でした。瞬く間にヒット商品になり、10年後にビリ決順位のその会社の売上高が1位になりました。学者先生の見立てはくつがえらされたのです。私は仕事上担当している会社を訪問する時は裏口から入り、社員の様子を見てから経営者と面談してきました。社員同士が挨拶をしているか、時間を守っているか、約束を守っているかなどなど、「時のしるし、sign(サイン)」は見えない所に存在しているのです。このことは重要です。

(7)今日はクリスマス礼拝ですので、話を元に戻します。11節〔(2:11)今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。〕ここに書かれている「メシア」とは、旧約聖書に書かれている「油注がれた者、救い主」という意味です。油とはオリーブ油のことです。オリーブ油は食べ物を調理する為に用いるのみならず、夜間の明かりとして、化粧品として、王様やユダヤ教の祭司の任職式での聖別のしるしとして用いられました。皆様もオリーブ油の美しさを良くご存じと思います。食品を炒める時には気高さが感じられます。

何と言っても夜間の暗闇を照らし出す明かりとして重要です。新約聖書のマタイによる福音書の25章に10人の乙女の例え話が書かれています。10人の乙女はともし火を持って、婚礼の花婿を迎えます。そのうちの5人の乙女は予備のオリーブ油が入った油壺を持っており、残りの5人の乙女は予備の油壺を持っていなかった。準備をしなかったのです。花婿が来るのが遅かった（つまり、キリストが来られるのが遅れたという意味です）、眠り込んでしまった乙女たちに、真夜中に花婿の到来を告げられた時に、5人の乙女たちのともし火は油は不足しており、婚礼の席に着くことが出来なかったのです。他の5人の乙女たちは着席しました。この譬え話は賢い乙女と愚かな乙女と記されていますが、事柄の本質は、暗闇の中で、私たちの苦難の人生の中で、どのようにして「時のしるし、sign(サイン)」を待つのか、待ち続けるのか、とすることに他なりません。

(8)話が違って世間では、教育は投資であると言われています。投資とは世間ではお金・金銭と考えられがちですが、投資とは、物事を考える力や判断する力を養うことでもあります。私は会社員生活43年間のうち最後の10数年間をベンチャー企業に投資をして、その会社を育てて従業員を増やし上場会社にする職場に勤務しました。次の時代を担う子供たちには、聖書の御言葉を学んで、物事を深く考え、判断する力を養い、英語などの外国語を学んで国際連合や国際通貨基金などの国際機関で働いて貰いたいと願っています。国際貢献を行なうためには、30年～40年は掛かります。それこそ教育は投資であると思います。皆様、そのように考えますと、お金の使い道が変わるのではないのでしょうか。学習する子供たちは懸命に学ぶようになるのではないのでしょうか。…日本の基督教の団体も目先のことに追われるのではなく、聖書教育の良さを世間にアピールすることが大切だと思います。…今日の聖書箇所14節には〔(2:14)「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」〕と書かれています。これを単なる絵空事と読ませるのではなく、このことの実現のために人間は何をすべきかが大切です。その為に必要な人材を育成し、費用を計算し捻出するのです。その為には、昔若かった高齢者も情熱を傾けて働き、しかる後に、天の国に行ければ本望ではありませんか。次の世代が生きて行くことが出来ることを確信し、安心して、バトンタッチをすることが出来るのです。〔(2:14)「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」〕今日はクリスマスイブ、明日は主がお生まれになったクリスマスです。クリスマスを迎えて、そして、新しい年2024年を迎えようではありませんか。

最後に20節をお読みします。〔(2:20)羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。〕今日は皆様に南板橋教会テレビ局の特派員・レポーターをお願いいたしました。お役目は如何でございましたでしょうか。楽しめていただけましたならば幸いです。

・・・お祈りします。